



勇士
烈婦

奇傳新話

律

13
3238
3



門 へ 13
3238
原 巻

昭和十年七月九日

音傳新結卷之四

能除邪惡貞烈虔女全婚事

人は勇怯あり自然乃性凡似く能義理とあるは義の
ために生れぬとあまるとりてざる時夫婦人女子も勇

氣のあふ備あり義理とて死すも是は義子ありり故
あつざる時勇極乃丈夫も時ありてはあれたるこ
らさあり只るに死なれども生れども死ともあれ義子
立附い勇余とのづらとるざり止むべし是今の昔
とあるぬ京都足利將軍義教の治世にありて録
念乃寛領足利九馬院持氏を去法正しく執事上校
憲實親臣賢明の人をして政事とせむに猶世乃中も



谷山平



ありね其比先年家名絶ありたる小山永賢が藩士共
八方に離散して二君に依りて生れ立りしあり者
民とありて書子と養ひ又い工高とありて世に
よ者もあり已にぬくあり申に橋津を志つと中
とい一人小山藩代乃勇士に高禄大友の長あり不
けりて家滅亡しよふとて二君に依りて生れ立
きたりたえに餓死ありとも工高とありて生と養
んを乃西目ありて天下れ去りて對せんや玉とあり
てふらりとも今も石と成たりてと鎌倉比企が谷
の邊に浪宅として餓死ありとも書女も病死して一
乃娘ありとて養育して愛多月と送りりたるこの娘は

若くは十四五歳より及んで容貌よき人廉しく父の教
に依りて書女として養育されたる業に巧みありあり
る長刀の術と練へて忍びたる業ありたりありて
くつりて其のいと人子結んで温柔和親ありて
仍依りてかりりり人近隣乃諸人も皆あつて
其家の貧乏ありとありね同徳に兩具と高よ者
に産四郎といふ者あり彼が姪あり者雷女に二歳乃
年増ねれども生得種平れ性にて編津りかえり
たりて姉妹乃ありて其の女業とていひて此産に
といふ者性質好なりと雷女が年長するにあり
其容貌乃艶ありとていひて盤書と習りて教回と

とども元來採ふ一と吾女子にゆれださう一居しき
に思ひよたえりて人とみく又なまへ娘と又書にせん
まて読んだあつた怒りとも其美とあつた
媒女の者にむらと我已あれごとく宮にあらばから
賤人より縁をとりてあつとも其偶にあつたその
てさびいれあつたりにるがれども今浪士とあつ
てかくれあつと貧家あれびんと見あふどりて我娘
と書とせんともあつたも答むごとくはを今れ身分は
士と縁と細人もかさうと高貴農民とつども
家筋あつた者あつた縁によつて難於に及ぶと又四郎
身分はくい娘と書にあらんと後來公と安んずる

不の 災厄我美とさつて向方にも憤怒あつた
あつたりたのこ入と遠根の涙と借しと説くはに妹
かれ者もとの美と主極して立向り美四郎と美引ふ
と美とのごとくさつとくやきるに美四郎もせんともあつた
りし止りぬおかし鶴屋八幡宮乃社修理あつた庄
巖あに倍し心遷宮乃日にあつて鎌倉中群集
あつたりとさつとあつたり雪の下に住居あつた茶種屋乃
子助あつたあつたり美容女あつた建長寺に入学して
願文字とあつたり美藝とあつた風流浮花の態と美
い古雅と好んで商家にあつたり死志士あつたり其日同士
の女と人と鶴屋と美詣し美より野外とあつたり胡比奈

乃切みへかりきりに寤寤の任使四五人碎柱の執に
面目中乃あつく酒氣あつりたる一人の志士を
美藤の娘とりほめて争論乃執に志士も娘を
かこひてさぬくにあつりとの方とくとも碎人一向
とりあつて是飛娘の世あつくと理不をあるり詞
のどくもだ助九郎義氣ある者なく見るにたえだ同
道の友と双方をたあせりたりありあつひきりに任
使ともつめく改子のつて一人でも相ふれ多きを面
白りれ互に力とたあし勝得る方へ娘と世あつくと
是飛乃つらあつてはくとかふとえ飛助九郎願力
量もあつて志士相諍て四人と投倒しをさつて

がれば彼志士たち怒ひ且其をさつては感し必竟一時の
とりあひはく者にもさつたり選恨もあつたればた
がひに和使してあつてはくつと利害と説き
はるに任使どもと碎も醒あつてあつと和儀とさつ
皆まじりし志士親子助九郎にむらてあつて
不附の災難兩人共志士悟きあつて不浅くね居方人
大恩謝一がごとと速に系に助九郎おつて懇懇
乃謝言うらつて願入あつたの志共一旦和解あつ共
又りや同族とあつて守りあつてもあつてあつて
さあれを先我家まで同好し一共う人ば
宿をたつりあつてせんて深切に申れを彼志士感謝

にたゞは是弱同乃の儀あれは所親子あそく由同乃
つふふと是より助九郎とはれどして雪の下彼
が室へ入り見れを大家にそ至極乃豪家とそんそ
男女あまゝあり助九郎親子と誘引してざうそ請
トきれを助九郎父助九郎夫婦も立出て丁寧にも
てかきれを彼を士も何となく感費して今日不
慮の災難ゆ子息乃恵にゆくとゆわくのこあは
是まで同乃子あり者あまてかかれそとゆ世
話子ありゆの胸中れ謝辞に上は速かしくとあは
く話話一食事とそて彼を士助九郎にむうん
各案も面目かたれども某いえ小山家の長下福津

たあつと申去あり主家滅亡後二君に依りて公
一人の娘と飄蓬して貧困と志のきあがし居りゆたの
ありさぬ申かかれおとれゆき志にあひゆ謝恩もは
くはごさちううあは是のこ残恨もたえたと悔乃
及とあつりやせれを助九郎の太子にゆりて小山
家れるの某代々大恩と受け一若れそえ来年久
きく菰沢の駅子住居してさあんどもを来はとそら
に轉宅してぬ所家の断後何やとる残念に存せし
不其所家の忠臣福津屋にゆいませぬ所家の所
奉ふともあらんふれを已来其子所心屋あは話用
某父子あがりやと懇懇子速かれ福津も流涙

あつて多しれ傍事ありとくどい何事も他家の恩と
あり又い農商とありとく主恩と思ふ者一人もあ
たれとらかくれどくありにき履及父子主家の恩
を忘れども某までくかくれどくれ感謝あるはた
某老年朝夕と師だん生涯をかかふといある一人
乃娘のこ何とぞ世話とゆく師中末の官仕か
アとも又家筋ある農家商家ありともさうは
安んとして死後ゆらく大恩のく是のこ控またの
と子れ助ち出の夫婦助九郎もあられと信しきるに
ちちが母七旬有餘あるが立知く對面してさうら
連合先助ちあらん天の師父稲津石見履と後方の縁

ありて在鎌倉乃節の時と履の客入師とさねあり
秋とも志くく師物かたりありとすり不附乃變に
師家も滅一師家中もちりくにありゆのひ天の
匠家もつらにやと尊りらめさあくどもある夫か
書にむ子からる一が今日子供人乃師物語りはく
りひまはえりゆま出由目にかりゆと涙子ふれてか
アきるに稲津もくそえくあるゆに思ひは横手と
て師とだんかくれ師物語りむ子言くありぬのぐれ
ぬ縁ありて不思議子助九郎履の師世話ゆ角名
合きるぞ嬉しれと且泣且喜びて家内各悦び
ととあえりるを母稲津むむらく水息女の師やう



正義廉にして端方正儀れども入山渉を多れ
心かり我身よまててさるる一奉るを孫ある助九郎
商家にありとてども一養をある者あるを今日と
吉日やうく行とぞ孫が妻女に終りふべし縁もか
さかりげ上のあんど又あらんやとていひてい
助ちる夫婦もともくりにをい求められを福津ちよ
よりさびてゆくとより復瘵の身か聲とあふぶのこ
にく士類農商の区別ふ一助九郎乃養を士類子
も向きあり子万統忌かぐく只貧家に人とあり
たる娘和熟乃やとてそのこあつる娘とてさるるえ
られを助九郎も赤面して万一父母のせきにまらぬ

息女と終りあをむ望け上か一とやりふに雪女も
たのむおげにさうらうむき居るりあはるく何
あくお徳さらゆりきんを福津もすらさび子とん
おけう子物束あり娘の進トさあくども自ら養
貴家より入つてさるるありてい幸意あはる貧家の
天ありつとてくも船にあふ一貴家の元はざんよ
つて天命れ貧賤とめざらんこれ私あり某と
某とらうたう生涯ハ饑渴にもなるまじとて善比色
とてあひあひて娘にほまきく福津ハ我身子ゆりたる
は財先づく雪女に執心あかり一雨具高ふた回
席けよとほくえ笑ひて嫉妬の情止ぐく業種屋

新編新古今和歌集卷之四

乃孫氏四郎と娘とらうさんと種と云ふあせども
其子娘と多段類とひくあせとくあは吉田信隆
とつる醫師ありえん来吉田要人とつひ浪士あ
るが性年鳥者檢校とつる不家豪れ盲人とつひ
あらせ鎌倉中へ高利乃金銀と借して其利倍によ
つくと名譽とつひとく金銀と多くと驕奢にこそせ
諸人の雅美とたりたり其世諸世要人一人まで八
方とせあをとりてあせ凡とつくと刃上と威却する
者多りり凡れを公道より吟味かり鳥者吉田悪
事流とと流取して鳥者へ宰死一要人の困をかまひ
にくれのさ遊放とあつりは要人大膽者にくと歸産

に髪ととりれと一齒二枚とりとさとりて醫とら
鎌倉子夜任せりやうとひかりきれをとれと知るそ
もあげまど肉とありとるそひ憎ととありきりけ
信隆と四郎が存念状とつひと祇とつりこも瓜以
て茶種屋と梅津が縁と破らん子掌中にあると
つひ凡れを去四郎と子よりとつひて其子娘と同あま
祇子ありされよとくあせと其身美とくつひと
て供人とつひとて君の下れ茶種屋へつひと屋敷
うづりきりに見世乃手代其用とつくに彼醫者
もるの自分相承の茶種の中とつひと別室にくと心
中たしとつひ凡れを去をとり手代二階へ侍ひくと

此の如くは湯とくのもろくはるべき茶品はつらやと同
きるに之毒乃一種砒石斑猫乃類五六種とのどを
まをを茶代眉に皺とよせくかくせむと死毒茶
膏ひのち天下れ制禁あり去くれども病忘れよん
て是を用いて功あるによるく其種類あおるん
とくとも其病忘所用ひ方ありとくけ證文請
取の上責ゆるの我家れ法度あれを其れひむ
知あつてバ所のぞこれ茶品所はしやたつと昔
それを醫師お笑つて念の入るるま由人にこそ
ひそくに證しなよりやせりなり人の家の客ひ
證くごまあつねど其うけと速げれを其茶と

得るるあつたは是れおくお借りあはなり某ら言
田傳隆とつる醫師あり我近隣比企が谷に福津氏
乃浪士のわりの娘當年十七歳容貌秀麗にして今や
鎌倉中に比類あるるかゝあつたは娘幼年より異
病あつて痛背に銀乃おつた白毛數根生トその
毛針乃ごごく白猪乃毛に似たり抜されどもぬき又
生だ且腰股を急に辨と生トて穿山甲の背よひ
とく父を熱ひく神薬よいのり名家れ醫によ
つて種々療用とほくして八九才乃ころよるを全く
瘡親子よららびにえは成人にえごひひり
もかふらふかを年相應乃縁證するより父を

あるごとく歡喜一きりにしてその夜より背上の白毛股の
鱗形多く生じて其申うごいほどに妖怪乃おとす親
子多げにかかふことごとくに療治あせども一息のまじ
かゝるまじたるく突にわたり老人不詮あま天刑の疾
なり病愈とあらし子述く縁と断んとせよ異病とせよ
あらしたりおて控んと欲せども父子れ情をまじ
るは子悪びて密に某とたのこそ毒殺と行ひあを
其病乃名もあらしれば縁説乃先も恥辱ふれば日
比乃惡交ひと人またのこ入る落涙の上をこくれ西望
なり某もとの難流とさん一なり家傳に其病とや
と虫流乃奇方あり其説著一とくども我のまじ

これとやごとく娘と殺さんと覺悟ろ上ハ我一療治
あるごとくと説し合せ其某の内子右の教員乃毒某
あり故に此某種と求らありあかこは他言を利
なりと辨とあらして説りきれども代も大子孫と
さるれ縁あるは賣渡一某とて一と妻も入つて助
ちる父子に其物語と告ぐるに親子も勤轉あらし
か助ちる思慮あらしとあるは是偽あり不吉女に執
公あり者に殺れとあるはよめて我家との縁と断んと
の奸計ありいふんとあれば醫師稿津氏と惡友乃
ゆゑとあるは我家との縁断りいふとあるは其是病と
瘡なる毒某と我方にくと断く其病愈と説らとの

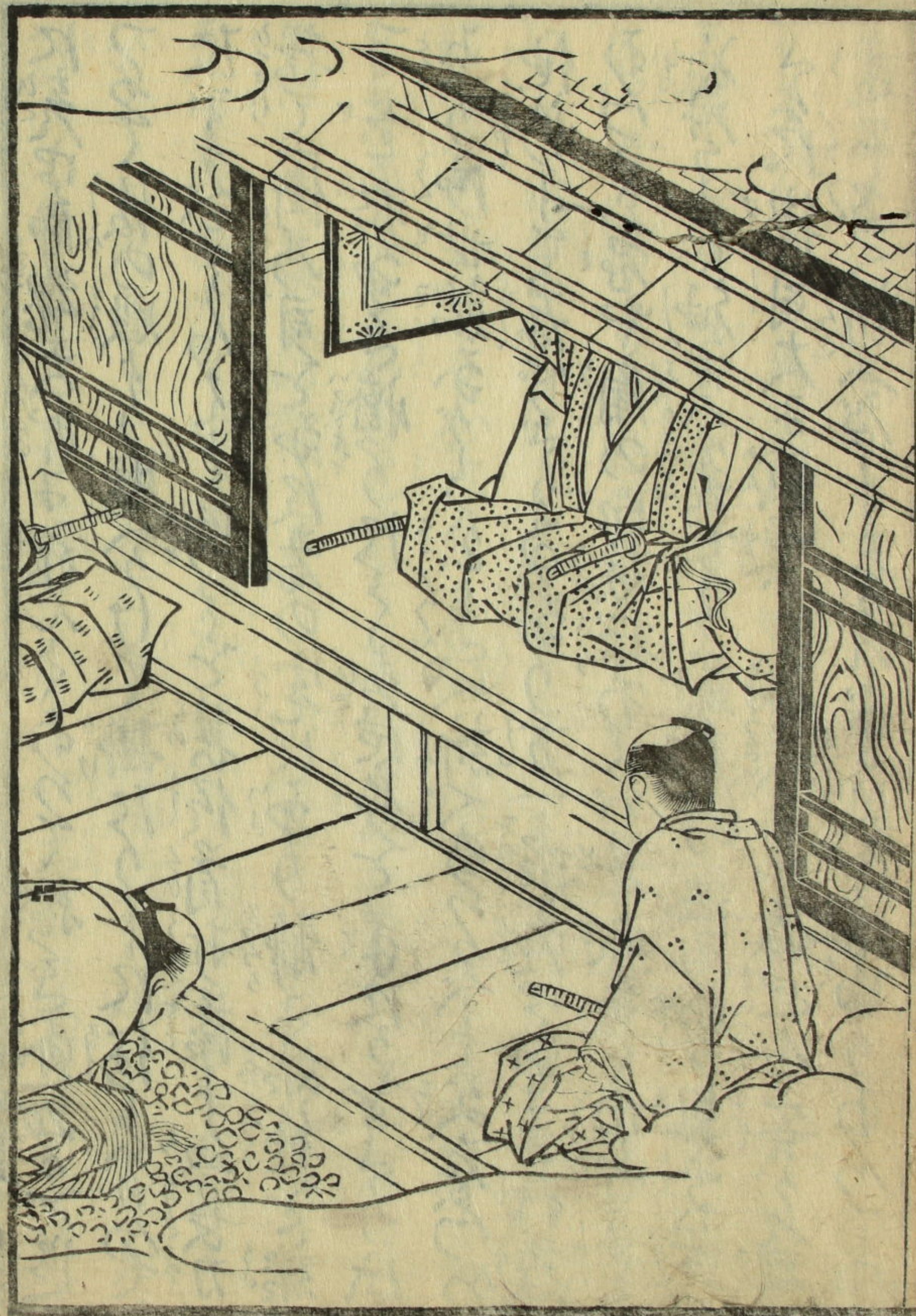
猶現色よりしりく取り届るといふも茶種素片の
り説きとらんくさゆとていと命とれば手付さり
げ形く茶種をゆきそは瓜飯一説文と請ふと傳
隆いゆりてはなり福津親子いけるも後にもあはる雪女
いゆりて人ふ一説をあるに一公一私に向い婚姻の
財節とゆきびらるに一文老四郎が姪ありおありて
お詰りれ序に密子やらの叔父あがらる老四郎おあり
悪善して其事あがらると憤りあはぬしく邪念子
いれく同教乃吉田傳隆といふ醫師とれを云子矣
病ありて司るとは法して君れ下乃茶種をより云
あは毒茶と賞められり我身あ人の密詰とゆきいこ

大よびとて君と姉妹乃ちあそありて包んもたまあ
又悪人にもせよ叔父の逆子あはるれも道あはるるや
せん角やせんと思ひぬれども思ひあはるる事れ
破縁とあり又毒殺乃難にも隔りのあはるるれり
され密子告あするや涙子れりて詰りらるに雪女
胸裏きいれどもさるるあはるる深切乃極志れごと
嬢いれ縁詰乃熱不熱ハ自然の事あればあはるる
眼あふるる老四郎及乃西行父にも詰りまるといふよ
く挨拶して彼女とゆきぬ五日十七日大氣明朗
ありらるる雪女父子向い今日乃天宗長雨まで用
もかー和濃の観音情をのまるといふにたふお

行傳行古集

うらぐき我志居りよりくも公づきもるや羽衣一
て立出たり其跡に雪女女童と称して老屋に
中紙一巻の毎度所歎と語り所返すに及たざる
が御目にかかり所返る中夜より品今より所逸にゆき
りしと所出ゆりにと申送りるに老屋四節大子と云ひ着
に仙家に入らる公はく衣服と改め笑とみぐれと相
も老あへてありんれを老女ハ早瀬とくくたきと
かけし長刀の鞘とくづし小腰子といふこと居り
老屋即寝ひいてりあり所にやと同よ子老女打笑
ひく自にあり病名と名く縁後所破らんせし
計ありとてり是惜せよといふ舌さらゆりにとる

に老屋即魂天外子死んてありて孫ぞ御出ると退
つめて後の股より腰へけて掛たりしに何れゆり
たまるべきとんと倒ると其後首打落し血長刀
掘て一街乃司とある者の宅にあり静子始終と語
て是非あり憎りしと老屋所を手にしとてりは
海り所世話るがら公も之新くありとて父なるは
他ゆして存せざるあり方一老屋は即子行撫
あつて老屋や角の所換授あつて是所あくはあり
ぬがしと神女と妻せし義舞の娘乃勇氣交り
るに御司大子感嘆し孫入る振也公安と早
速公も之新く老屋とてりも父所はゆりありての



上あつて入言上かかして先体息あれとつたに
雷女も落つてきて長刀の血を拭ひて流るる様
とて一居り間もあつく父をうたげりけし
あつておのれに角こそあつて事あり者方け
上の御世話子云ふと祈えのりぐと
御もあつて面笑妻せざれを町役人共賞嘆して
け父あつて女あり誠子武門のむけけそ神妙
ありと早速百連新えらるに雷の下れ助をうと毒
茶賣るる醫師の説文とあつて新えらるに官目共
委細子園届けて其後捕まをき一吉田信隆とと
らえあり先稲津親子とあつて尋問るふに稲津

たつ始終と言上一雷女売四郎姪乃お話に其
謀計とあり是れおく手に掛り人を殺したる先
生かぐらふか聊もあつてつらにも所仕を
より穂子言上一一毫の臆もあつて氣及らるを官人
何とも其勇氣と称し助をう方と尋問ふに醫師
ありて毒茶と求むに付中速る謀計あつて子ゆ
る説文とあり賣渡し御由り上ゆりけし稲津が
言上と尋問と合せられを信隆と引出してきび
あつて責問ふに陳ぶる事あつて巧乃次事
に新えらる一述られを官司残る書付に
て實實初長新えらるをば一件事已子落つて

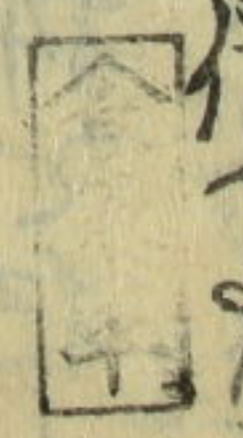
雷女も落つてきて長刀の血を拭ひて流るる様

十五

つらさひて詮議するがごとくと判罰と令せしむるに
うきもの身なく編津親子先世御親親と呼ばるる
傳隆が奸謀不屈を極あり町人として古く對し根
藩乃西のありあまたなりと雷女に語りし其節
心は其の解死人よらざれば切徳とすべし然上の編津親
子に何の御構なく又先世御一人乃悪事あるに親親
強くは御構なく又先世御一人乃悪事あるに親親
茶賣渡し親文を新え知るなり神妙あり先世御傳
隆が悪事先世御の上編津親子に御構なくある上の最
初御東のあり雷女と語りし初九郎書とあるに且
父なるに初九郎方れ合方請まされ初九郎書とあるに其意

に任ぜしむるに初九郎書とあるに其意
をさしうし命令ありしを編津親子に御構なく天地と
して慈悲と謝したるに初九郎書とあるに其意
御金之立御に居位あるは一罪死刑とあるに其意
上はかゝる邪暴とあるに人の執縁と破らんを云語
道助の不屈重きれ科にありしに磔にありしを中
一牢屋へと引こらるる然人雷女が勇操と云傳え
羨慕しが上の政及乃正しれと悦合をり史より吉原
と撰きて初九郎書とありし雷女と引こり初九郎が婦書と
つく仇讐相討ひ誅益其家報復せらるるたるに
安法し法神として強夢と号し刀劍の術と指南し障

あれを名山勝地と遊ゆして持奇に性情と述之
して助ちるるあり一丈話話して足と止るは細細
て竟子天然と云く八十五歳に病死ありと云
る編津が巻を記しるるに云く一丈の義士あり
とのがかりありける雪女が形すれふ一丈の道に
さる勇氣の道一尺かゝる藤人のかゝる徳義と云
たる事古も糸稀形り不率にして高家れ婦子終る
事惜ぐると時の識者嘆惜ありたるより諸の傳へる



奇傳新話卷之四終

